

大学進学における保護者の意識と役割¹⁾

永田純一，高地秀明，杉原敏彦（広島大学）

進路選択行動における高校生とその保護者との関係について、本学の説明会に参加した保護者と、本学への入学予定者に対してアンケート調査を行った結果、保護者は大学選択よりも学問分野・職業についてアドバイスする傾向があること、母親が女子生徒に与える影響がより強いことが示された。アンケート調査の内容と考察、及び今後の課題について報告する。

1 はじめに

大学と大学で学ぶ学生の保護者、あるいは受験生の保護者との関係は、近年どのように変化しているのでしょうか。大学入学前から大学を卒業する時期は、青年期に該当し、アイデンティティの確立がその主な発達課題となる等、「自己」と「他者」の関係が非常に重要な時期である。進学・就職を考える高校卒業時、さらに大学卒業時といった時期は、このような発達課題に取り組む非常に良い機会ともいえる。

その一方、大学における初年次教育は、学生のその後の大学教育への適応力を大きく高めることが近年指摘されている。普遍的知識体系の修得のみならず、学生が自分自身のキャリアパスを考え、どのように「自己」を位置づけるか、といったことについても多くの大学において入学後の早期に、さまざまな導入教育が実施されている。また、入学後の保護者への説明会の実施や、毎年次修了時での保護者への成績通知、さらに保護者との個別面談の実施といった大学の取り組みは、このような発達課題への取り組みに、大学が直接的に関わることを、明示的に意思表示し始めたものともいえる。学生の保護者もまた、学生の成長を期待している支援者と考えられるならば、大学教育における保護者の役割について検討することは、今日的な意義があるのでは

ないだろうか。

前述したように、高校から大学にかけては、青年が「自己」と「他者」を見つめなおす非常に重要な時期である。そういった中で、志望分野の選択、さらに志望大学の選択といった選択行動を行わなければならない。「他者」をどのようにとらえ、また、「自己」の意思決定の中にそのことがどのように関わってくるのか、そのメカニズムを理解することは、非常に興味深いテーマであり、これまでも国内外において、大変多くの調査や研究が報告されている。例えば、日本教育学会入試制度研究委員会編(1983)においては、1970年代後半の宮城・東京・愛知の高校生の進路選択に関する調査結果を報告している。また、「高校生の進路についての調査」ワーキンググループ(2007)、全国高等学校PTA連合会・リクルート(2011)等では、全国規模の調査結果が示されている。その他、認知メカニズム等に関する分析として、楠見ほか(2008)は、「認知過程」と「感情過程」の双方を対象としたモデル分析を行っている。親の学歴が子の学歴にどのような影響を与えるかといった世代間の学歴の関係等については、刈谷(2001)、吉川(2006)の他、多くの先行研究がなされている。本報告では、本学主催説明会に参加した保護者を対象としたアンケートと、本

学入学予定者を対象としたアンケートをもとに、高校生と保護者のかかわりについて得られた知見を示す。

**2 現在の高校生の親世代
～大学進学率の推移～**

図1に1955年以降の我が国における大学への進学率の推移を示す。この1955年以降現在までの約60年間では、よく知られているように、1960年代以降の急激な進学率の上昇とその後の1975年頃からの停滞、そして1990年以降の再上昇といった変化を示している(図1)。

様々な要因の結果として生じたこの進学率の推移に、親世代の高校卒業の時期をあてはめてみたい。吉川(2006:第5章)は、親世代の大学進学率(推計値)と子世代の進学率(実測値)の比較を行い、二世世代間の進学率の差の検討を行っている。一方、片岡(1990)は、三世代にわたる分析を行い世代間の学歴の関係について、「祖父効果モデル」の一定の妥当性を示している。

ここでは、われわれが高等学校でこれまでに行ったアンケート調査²⁾の結果から推測される親世代の進学率と、さらにその親世代(祖父母世代)の進学率の検討を行ってみたい。表1は、広島県内の公立普通科高等学校2校において、高校生とその保護者を対象とした進路意識調査において得られた親の年齢分布である。5才ごとの区分で見ると、父親は45～49才、母親は40～44才が最も多い。調査対象の学年は1・2年生(16・17歳)であり、親子間の年齢差は父親で28～33才、母親で23～28才程度が最も多いと推測される。この結果を安易に一般化できないが、仮にこの2校における親子間の平均的な年齢差を30才程度と考えた場合親世代の多くが高校を卒業した時期は1980年代であり、さらに、同様の年齢差を祖父母世代に仮定すると、祖父母世代の高校卒業は

表1 親の年齢分布(広島県公立高校2校における進路意識調査結果(2012年)²⁾

年齢(才)	父親(人)	母親(人)
～39	9	19
40～44	98	163
45～49	131	139
50～54	84	36
55～	26	5

1950年代と推測される。「祖父母」世代が高校を卒業する時期をPeriod 1 [=P1]

(1950年代)、「親」世代が卒業する時期をP2(1980年代)、そして、現在をP3(2010年代)とすれば、これまでみたとおり、P1→P2→P3となるにつれ、我が国の高等教育への進学率は上昇している。男女計での進学率をみると、P1では約10%、P2では約30%であり、現在が約50%である(図1)。つまり、ちょうどこの3世代がそれぞれ「エリート段階」「マス段階」及び「ユニバーサル段階」の3つの状況に対応している(トロウ,1976)。ユニバーサル段階の子の大学選択に対する親の関わりは、他の時期とは異なっていると考えられ、その差異に興味をもたれる。

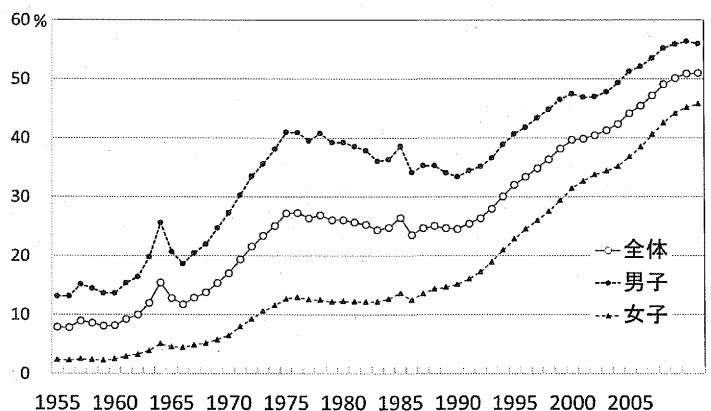


図1 大学への進学率の推移(文部科学省学校基本調査より)

3 保護者及び入学予定者に対するアンケート調査

3.1 保護者対象アンケート調査

本学では、毎年6月から7月にかけて、西日本の8都市（広島、岡山、松江（米子）、山口、高松、松山、福岡及び神戸）で、本学主催の大学説明会を開催している。参加者の多くは高校生や既卒の受験生であるが、近年保護者の参加が増えている。そこで、平成23年度の説明会では、高校生・受験生とは別に保護者を対象としたアンケート調査を行った。高校生・保護者等の総参加者数は1,237人であり、このうち保護者267名から回答を得た（保護者参加者の総数は不明）。質問項目は、全国高等学校PTA連合会・リクルート(2011)を参考にし、一部新規の項目を加えている。

図2に「子どもの進学についてどのようにお考えですか」に関する10項目の質問への回答結果を示す。多くは、調査前に予想されたものであるが、いくつか特徴的な結果についてふれてみたい。

まず、「①やりたいことができる学校に進学してほしい

表2 「子どもの進路についてどのようにかわりますか」の質問内容と“当てはまる”と回答した割合（括弧内の数値）

- ①子どもと進路についてよく話し合う (65%)
- ②あまり干渉せず子どもを見守る (29%)
- ③子どもに合う分野をアドバイスする (35%)
- ④就職か進学かを選ぶ際にアドバイスする (6%)
- ⑤大学か短大か専門学校かを選ぶ際にアドバイスする (6%)
- ⑥将来の職業をアドバイスする (34%)
- ⑦子どもに合う学校にどんな学校があるかを調べる (34%)
- ⑧どんな学部、学科、コースがあるかを調べる (46%)
- ⑨興味をもった学校の資料請求をする (44%)
- ⑩興味をもった学校の見学に行く（オープンキャンパス・学校見学会など） (67%)
- ⑪興味をもった学校の入試方法を調べる (40%)
- ⑫具体的な受験校を子どもにアドバイスする。(13%)

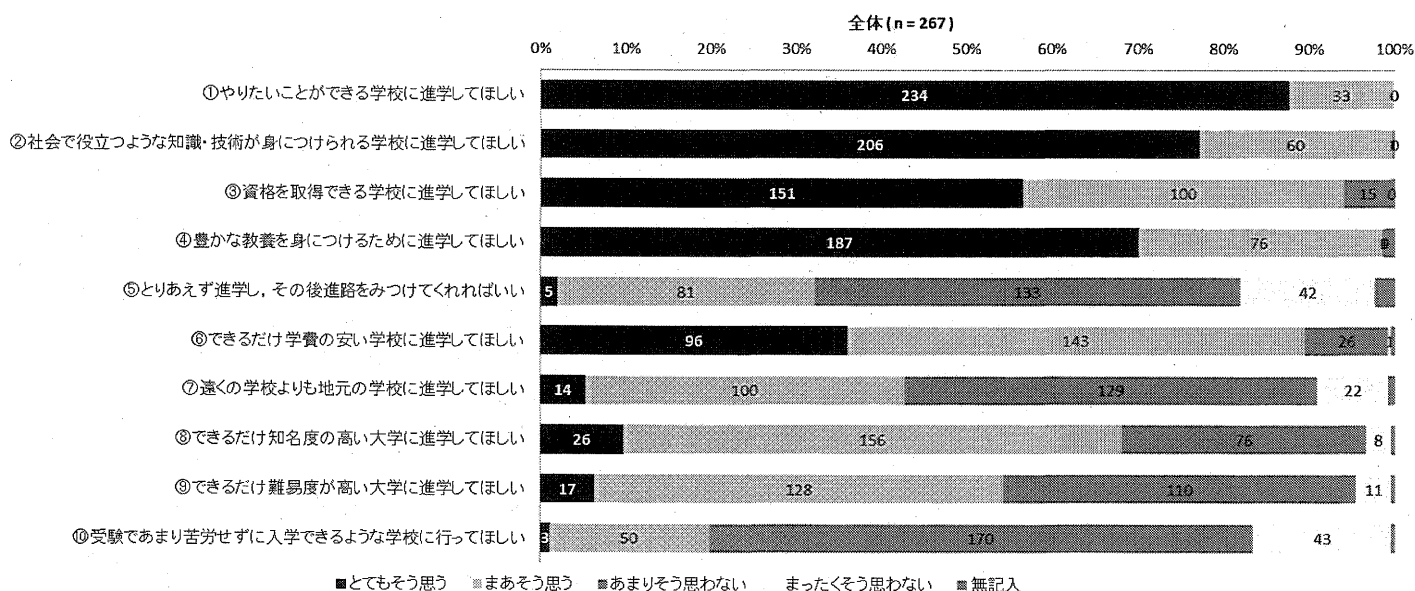


図2 「子どもの進学についてどのようにお考えですか。a～dの当てはまるものに○印をしてください。a. とてもそう思う b. まあそう思う c. あまりそう思わない d. まったくそう思わない」への回答結果

略)」の質問には、9割近くが“とてもそう思う”という強い肯定を示しており、まさに子どもの考えを尊重していることの現れと考えられる。④についても7割が強い肯定の回答であり、大学教育に対する一般的な親の願いが示されている、といえる。一方で、②と③は今日の社会・経済状況を反映した保護者の価値観として、将来社会に出て役立つ学問や資格取得を目指してほしいといった意識があると思われる。⑧と⑨のように大学の社会的威信を重視する傾向も少なからずある。また、⑤と⑩のように、モラトリアムの追認、あるいは進学を目的をあいまいにすること、受験勉強等の努力をあまり求めないような姿勢には否定的である。

以上から、本学単独の説明会に参加している保護者の多くは、大学での学びに対し、高等教育の理念に対する強い共感を示す一方、現実的な社会環境への適応を望んでおり、安易な大学進学は避けたい、という志向を持っていると考えられる。

一方、「子どもの進路についてどのように関わりますか」に関する12項目の質問は、保護者の行動を分析対象としたものであり、表2に質問内容と回答結果を示している。

「①子どもと進路についてよく話し合う」と「⑩興味を持った学校の見学に行く（オープンキャンパス・学校見学会など）」については、いずれも7割近くが「当てはまる」と回答している。その一方、「②あまり干渉せず子どもを見守る」も3割程度が「当てはまる」であった。また、「③分野をアドバイス」「⑥職業をアドバイス」は“当てはまる”がいずれも3割程度で、同程度の割合を示している。その一方、「⑫具体的な受験校のアドバイス」は、これらよりも低い割合であり、強くは介入していないことが伺える。

今回のアンケートは、本学への進学を希望する高校生の保護者を対象とする極めて限定的なものであり、結果の一般化については、

今後よく検証する必要があるのは明らかである。

3.2 入学者に関する調査

入学センターでは入学予定者に対し、「入学者に関する調査」として、毎年高校時代の学習時間や進学に関する満足度等について調査を行っている（広島大学入学センター2009）。

この調査の中に、「受験・入学を決意する際、もっとも影響を受けた人は誰ですか」という質問項目がある。平成24年度入学者の結果をみると、全学の集計結果からは、「無し」が最も多く32%、次に「高校教員」（27%）、その次に「父親・母親」（17%）の割合が高くなった。一方、学部・学科等の募集単位ごとにみると、かなりのばらつきがあり、「高校教員」は60～5%、「父親・母親」は45～4%、「無し」は56～0%の範囲となり、違いがみられる。一方、入試方式別にみたときにも、『もっとも影響を受けた人』に若干の違いがみられる。たとえば、「高校教員からもっとも影響をうけた」という回答の割合は、一般入試では約3割であるが、AO入試では約4割程度

表3 最も影響を受けた他者が「父親」であった回答者の性別による比較

	父親を選択	父親以外を選択	合計
男子 (%)	96 (8.0)	1,107 (92.0)	1,203 (100.0)
女子 (%)	45 (6.3)	670 (93.7)	715 (100.0)
合計 (%)	141 (7.4)	1,777 (92.6)	1,918 (100.0)

χ^2 検定：非有意

表4 最も影響を受けた他者が「母親」であった回答者の性別による比較

	母親を選択	母親以外を選択	合計
男子 (%)	81 (6.7)	1,122 (93.3)	1,203 (100.0)
女子 (%)	111 (15.5)	604 (84.5)	715 (100.0)
合計 (%)	192 (10.0)	1,726 (90.0)	1,918 (100.0)

χ^2 検定：1%水準で有意差あり

である。ただし、「父親・母親」については入試方式による差は少なく、その割合は、いずれも約2割程度であった。

保護者（父親・母親）の影響における子どもの性別による比較を検討してみたい。表3と表4に、男女別に「父親」及び「母親」を最も影響を受けた他者と回答した者の割合を比較している。これらの結果から、統計的には父親の影響について有意差はみられていないが、母親については有意差があり、「母親-女子」が「母親-男子」よりも割合が高いことが示されている（表4）。

次に、学問領域別（募集単位別）の違いについて、さらに検討を行ってみる。過去5年（平成20～24年）のデータを比較し、特徴的な傾向を示す理数系の募集単位Aと医療系の募集単位Bを取り上げたい。募集単位Aにおいては、保護者（父親または母親）を最も影響を受けた他者とする割合が、ほぼ毎年10%以下である一方、募集単位Bでは、逆に20～30%程度を示している。表5で示されるとおり、 χ^2 検定では1%水準で有意差があることが示されている。

ここで、募集単位AとBにおける回答総数に占める女子の割合みてみると、募集単位B（95%）の方がA（5%）よりも極めて割合

表5 最も影響を受けた他者が「父親」または「母親」の回答者数の募集単位別の比較

	父・母を選択	父・母以外を選択	合計
募集単位A (%)	2 (5.0)	38 (95.0)	40 (100.0)
募集単位B (%)	16 (30.8)	36 (69.2)	52 (100.0)
合計 (%)	18 (19.6)	74 (80.4)	92 (100.0)

※募集単位A：数理系，募集単位B：医療系
 χ^2 検定：1%水準で有意差あり

が高い。表4で示されたとおりに、「母親-娘」間の影響は強いと推測されることから、学問領域の相異というよりも、回答者の性別の相違が反映された結果とも捉えられる。

しかし、医療系の他の募集単位Cでは、女子の割合は20%程度と低いが、最も影響を受けた他者は親である、と回答した割合が20%を越えている。この場合、親の影響として性別以外の要因も検討する必要があると考えられる。

以上の結果を概観すると、全体としては、女子学生は母親の影響をより強く受ける傾向があり、そのため女子入学者の割合が高い募集単位ほど結果として、高校教員等ではなく、保護者の影響が強い傾向を示すと考えられる。しかし、このような結果だけでは説明できない募集単位の場合も存在し、男女による差異以外の要因を解明するには、今後、より焦点化した分析が必要であると思われる。たとえば、保護者の職業、就職及び教育に対する考え方との関連、子どもとの関わり方等の分析である。また、インタビュー調査による質的調査も効果的であると思われる。

4 まとめ

説明会における保護者対象のアンケート結果からは、(1) 保護者は安易な大学選択を望んでいない、(2) 高等教育の理念への共感、(3) 受験する大学選択よりも職業・学問分野のアドバイスを行う傾向がある、といった点が示された。また、入学者に関する調査結果からは、(1) 進路選択における保護者の影響では「母-娘」の関係が他の関係よりも強い、(2) 学部・学科毎にばらつきがある、(3) 女子の入学者の割合が高い学部・学科では保護者の影響が強く示される傾向がある、等が明らかとなった。2節で述べたとおり、親世代の高等教育進学率の上昇に伴い、高等教育の理念への共感は、今後より高くなっていくと思われる。それと同時に、学問分野に関するアドバイスも、親の経験を伝えやすくなると考えられる。その中で、女子の大学進学率の上昇に伴い、多様な学問領域を経験した母親が増えることで、今後母親が影響を与える学問領域も広がっていくのではないだろうか。

今回の調査対象者は、本学の説明会に参加したという限定された保護者と、本学への入学が確定している者であり、幅広い一般的な保護者ではなく、また進路選択を模索している高校生でもなかった。今後、議論を一般化し、保護者と高校生との関係についてより質的な側面を明らかにすることが重要な課題である。その為には、より多くの多様な進路を目指している高校生とその保護者に対する調査を進め、その関係性が明らかになるような質問項目を設定する必要があると思われる。

付記

本研究はJSPS科研費 23653268 の助成を受けたものです。

注

- 1) 全国大学入学者選抜研究連絡協議会（第8回）の研究発表「大学志願者における

保護者の進路支援意識と大学広報」に一部加筆及び修正を行った。

- 2) 広島県の公立普通科高校2校の1・2年生及びその保護者を対象に、進路選択に関するアンケート調査を実施した（2012年3・4月、回収数：825人（高校生）、387人（保護者））。

謝辞

アンケートに協力いただいた高等学校の関係者の皆様に心より感謝いたします。

参考文献

- 広島大学入学センター (2009). 『入学者選抜に関する調査研究報告書』広島大学入学センター.
- 荻谷剛彦 (2001). 『階層化日本と教育危機—不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂.
- 片岡栄美 (1990). 「三世代学歴移動の構造と変容」『現代日本の階層構造3 教育と社会移動』東京大学出版会, 57-83.
- 吉川 徹 (2006). 『学歴と格差・不平等—成熟する日本型学歴社会』東京大学出版会.
- 「高校生の進路についての調査」ワーキンググループ (2007). 『高校生の進路追跡調査・第1次報告書』東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター.
- 楠見孝・栗山直子・齊藤貴浩・上市秀雄 (2008). 「進路意思決定における認知・感情過程」『キャリア教育研究』, 26, 3-17.
- 日本教育学会入試制度研究委員会編(1983). 『大学入試制度の教育学的研究』, 東京大学出版会.
- マーチン・トロウ (1976). 『高学歴社会の大学』, 天野郁夫・喜多村和之訳, 東京大学出版会.
- 全国高等学校PTA連合会・リクルート (2011). 『第5回 高校生と保護者の進路に関する意識調査 2011』.